

# 1

## 「愛着」という視点から 見えてくるもの

### ★増える「気になる子」「指導困難な子」

保育所、幼稚園、学校で、そして、家庭で、「どうして、こんなことをするんだろう?」「今までのかわり方では、余計、その行動の問題が増えてしまう」「強く注意・指導すると、大暴れして止まらない」「どのようにかかわればいいのかわからない」と感じられることもたちが急激に増えています。まさに、「気になる子」「指導困難な子」「かわり方がわからない子」の増加現象です。

筆者は、保育所、幼稚園、小学校、学童保育、中学校、高等学校、特別支援学校、児童福祉施

設、医療施設等の保育など教育・福祉の現場に出かけ、こうした子どもたちへの支援のアドバイスに駆けずり廻っています。本書では、このような子どもたちをどのように理解し、どんな支援をしていけばいいのかを「やさしくわかりやすく」お伝えしたい、そのことで、現場の先生方や子どもにかかわる人たちの支えになりたいと思っています。

★  
❗  
「愛着障害」「愛着の問題を抱える子ども」という視点

こうした子どもたちを正しく理解し、支援するために必要なのが、「愛着障害」「愛着の問題を抱える子ども」という視点なのです。愛着障害という視点は、専門家の中にもまだまだ共有されておらず、そのことが、現場で子どもとかかわり支援しておられる方々の混乱とご苦労を増幅しているという現状があります。

それは、「学校では発達障害とよく似た行動をしているが、家では問題ないとして受診してこない」「発達障害との診断があり、研修等で学んだ支援をしているが効果がなく、改善が見られない」「発達障害が疑われたので受診したが、発達障害ではないと診断されたので、どうしていいか途方に暮れている」という現場の先生方の声に現れています。

今、現場で起こっているいちばん残念なことは、「愛着障害を発達障害と誤解して、発達障害への支援をしても改善せず、徒労感だけが残ってしまう」「気になる子どもへの対応に苦慮して専門家につないでも、発達障害とは認定されず途方に暮れる」「愛着の問題に気づいていても、それは

親子の問題。もうこどもがこの年齢では手遅れと誤解して、できることはない諦めてしまふ」、あるいは「愛着の問題を愛情不足と誤解して、愛情を注ぐことでかえって行動の問題を増幅し、余計、疲弊してしまふ」等の現象です。

このような現象に接しところが痛むと同時に、こどもとかかわるすべての人が、正しく愛着障害を理解し、その支援をしていただくことが大切だという思いを強くしています。

どうしてこのようなことが起こるのでしょうか。それは、心理・医療の専門家が、こどもが実際の生活をしている現場に赴かず、診療室やカウンセリングルームでこどもをちよつと見て、あるいは、単に心理検査や発達検査だけをして、親の訴えだけを聞いて、診断・判断してしまふからです。

愛着障害は、生活の現場でこどもがどのように行動するのか、その感情の発達の状態とともにしっかりと観察しないと見えてきません。そして、その愛着修復支援も、数か月に一回から数回の診療やカウンセリング、心理療法で修復できるものではないのです。また、愛着障害に対する誤解が診断や理解を躊躇させ、その支援を妨げるということも起こっています。正しく愛着障害を理解し、支援していく必要性を痛感しています。

## ★「親子関係のウソ・ホントクイズ」

愛着障害を正しく理解するには、そもそも、愛着とは何なのかの説明から始める必要があります。

### 親子関係のウソ・ホントクイズ [改訂新版]

- ① ( ) 落ち着きのない子どもには、「動き廻ってはいけません」とその都度、しっかり叱ると、落ち着いてくれる。
- ② ( ) 人間関係に問題を抱える子どもは、できるだけ早く子ども集団に入れて、集団に慣れさせたほうがいい。
- ③ ( ) 子どもが非行に走りやすいかどうかは、母親が就労しているか、両親がそろっているか、家庭の貧困と関係ある。
- ④ ( ) 親が子どもと一緒にいる時間が長いほど、子どもには、いい影響を与える。
- ⑤ ( ) 就労している母親をもつ子どもは、それを不満に思ったり、寂しがっている。
- ⑥ ( ) 親として不適切なかかわりをしなければ、子どもの問題行動は生じない。
- ⑦ ( ) 母親の育児不安は、父親が子育てに参加しているほど、起こりにくく、参加していないほど起こりやすい。
- ⑧ ( ) 親は自分が自分の親に育てられたようにしか、子どもを育てられない。
- ⑨ ( ) 子どもの社会的発達や探索心に影響を与えるのは、父親のほうである。
- ⑩ ( ) 生後1歳6か月くらいまでの育てられ方の影響は、非常に強く、大きくなってからそれを取り返すことはできない。